

朝鮮工鉱業生産指数(1914—40年)

溝口 敏行

〔I〕 序

本論の目的は1914年(大正3年)から1940年(昭和15年)にいたる朝鮮の鉱工業生産の名目金額および実質金額の指数を推計することにある。ここで、あえて鉱工業生産額および実質額の推計という用語を採用しなかったのは、戦前の生産統計のカバレッジに対する情報の不足を認識しているからであって、この点を除外すれば、本来の推計作業と大差はない。

ところで、卒直に言って、本論の作業が開始されたのは、朝鮮の鉱工業生産の分析に興味の中心があったわけではない。筆者は約6年前より台湾および朝鮮の長期間にわたる物価指数の分析をおこなってきた¹⁾。この研究はGNE各コンポーネントに対応する物価指数を作成するとともに、それを利用してその周辺の統計データを分析し、これらの期間における朝鮮・台湾の経済状況を明らかにすることを目的としていた。この場合、個人消費、政府消費及貿易とならんで、設備投資、建設投資は重要な要素となる。そして、この2者の動向をコモディティ・フロー法的な接近によって求めるためには、鉱工業生産統計と貿易統計の利用が必要となってくる。貿易統計については、筆者が貿易物価を分析した副産物として整理がおこなわれた。更に、台湾の鉱工業統計については篠原氏の研究があるので²⁾、これに原統計の情報を追加すれば作業をおこなうことが出来る。かくて

最終的なネックは朝鮮の鉱工業生産統計ということになった。ただ、作業量のefficiencyから考えると、投資分析のためのみに生産統計を整理することは効率的ではない。というのは、このような目的に利用される統計数字は、斉合性をもった生産統計の一部を構成していることが望ましいからである。

本論の研究を支えてきた動機は、以上述べてきたようになりかなり消極的な性格のものであり、篠原、塩野谷氏等が戦前の日本の鉱工業生産の推計にあたってもちあわせていたような強烈な問題意識があるわけではない。したがって、本論ではこれらの数字からどのような事実が指摘出来るかについてはあまりふれられていない。それにもかかわらず、ここに推計結果を公表する理由は、より多くの専門家の批判と利用を期待するからにはかならない。戦前の台湾の工業が製糖業を主体とする食品工業にかたよっていたのに対して、朝鮮の鉱工業は多様な生産物を産出していた。また戦後の韓国経済が工業を主軸に発展してきたことの背景を分析するにあたってはまた本論の数字は参考となり得るであろう。

〔II〕 データと推計法

一般に、日本統治下における台湾と朝鮮の統計を比較してみると、台湾のデータのほうがやや詳細な感を受ける。鉱工業に関する生産統計についても、この事実にはかわりはない。朝鮮の工業製品、鉱業製品に関する生産金額の情報は、

朝鮮総督府『朝鮮総督府統計年報』

より得ることが出来る。同年報では、集計値としての「工産品」、「鉱産品」の生産額を報告してい

1) 溝口敏行「台湾および朝鮮における物価指数の長期系列の推計(1),(2)」、『一橋論叢』第65巻第5-6号、1971年、「日本統治下における台湾および朝鮮の貿易物価指数の推計」、『一橋論叢』第69巻第5号、1973年、「日本統治下における台湾・朝鮮の貿易物価の分析」、『一叢橋論』第69巻第6号、1973年。

2) 篠原三代平「工業化と貿易——戦前を中心として」(篠原三代平・石川滋編『台湾の経済成長——その

数量経済的研究——』、アジア経済研究所、1971年第2章)

るが、各年別に検討してみると品目のカバレッジが年々相違しており、これらの集計値を時系列としてそのまま使用するにはあまりにも問題が多いことがわかる。このことから生産金額の系列を得るにあたっては、個別品目のレベルまでおいて作業をすすめる必要がある。

このような見方から、日本統治下の朝鮮における工業統計をみると、1913年以前の数字は比較的少数の品目に限定されているという理由で研究の対象から除外したほうがよさそうである。また、1941年以降についても断片的なデータしか得られない。更に、われわれが対象とした期間も、情報量という点からみて、次の3時期に分割出来る。

第Ⅰ期 1914—18年

第Ⅱ期 1919—27年

第Ⅲ期 1928—40年。

このうち、最も良好なデータが得られるのは第Ⅲ期である。この時期においては、品目別の生産金額、生産数量が得られる。もっとも品目のカバレッジはこの期間内においてもことなる。1940年のカバレッジは他の年と比較して非常に高く、1928—9の両年は、1930年代の年に比較してカバレッジが低い。この欠点を補充するために、各品目の生産額をまず戦前の産業分類によって分割し³⁾、カバレッジの変化によって明らかに脱落していると考えられる品目については、類似品目の動き等を参照して補外した。更に、数量と金額の動きを比較することによって、いくつかの原材料のミスも修正した。この場合問題となるのは、「その他食料品」等にみられるような多数の品目よりなる項目のとりあつかいである。これらがカバーしている品目の範囲が時間的に一定であるという何らの保障はない。事実、道別の統計をみるとかなり不規則な時系列変動を観測することがある。そのような理由から、この種の時系列にしめされた金額の動きをそのまま採用することは賢明ではない。本論では、まず信頼出来る推計が一応可能と考え

られる品目群別に時系列を作成し、その合計値(A)を計算した。ついで、『年報』に示されたすべての産出額を、1934—36年平均について産業別に合計し、その値(B)と対応する年のAに対する値(A')の比 B/A' をA系列の各年値に乗ずることによって産業別産出額を計算した。この手法は B/A' がそれほど大きく1をうまわらないケースには有効な手段と考えられるが、われわれの作業過程では1.5をうまわるものは皆無であったことから、この近似が以下の作業結果を大きく左右するとは考えられない。

1928—40年に関する推計は上記のようにかなり慎重にすすめることが出来るが、データ上の理由から1つの留保をおかざるを得ない。その1は、「従業員4人以下の事業所」における「自家消費」を含めるか否かについて年別にことなっているからである。この相違から生じる誤差は無視し得るものではないであろうが、これを補正することは不可能でないまでも非常に困難であるので、今回は何らの調整をおこなわないで作業をすすめることにした。その2は、鉱業、電力、ガスについての生産額の情報が1937—40年について得られないということである。以下示される鉱工業生産額の推計では、他の工業の成長率でこの期間の補外をおこなっているが多くの問題が残されていることは明らかであろう。

本論の試みの特色の1つは、全朝鮮に関する推計と並行して、現在大韓民国の行政圏のおよんでいる地域——以下この地域に関する戦前の記述をおこなうにあたって仮りに「朝鮮南部」⁴⁾という言葉を使用する——についての工鉱業生産の推計をおこなったことである。第2次大戦後の韓国の工鉱業生産の発展には注目すべきものがあるが、そのinitial conditionとしての戦前期の工鉱業生産の状況を知っておくことは重要なことであろう⁵⁾。本論では、京畿道、忠清北道、忠清南道、

4) この呼称は現在問題となっている国名をめぐる政治的名称とはまったく無関係である。

5) この種の目的を完結させるためには、韓国——朝鮮南部間の実質生産額比較が必要となる。この種の試みはある程度まで進行しているけれども、紙数の制約上ここに示すことは出来ない。

3) 通産省『工業統計50年史』、1963年。なお、篠原氏の台湾に関する推計の場合と対比するために、専売品のうち阿片、塩、人参製品は化学工業、酒類、タバコは食品工業に加えた。

第1表

鉱工業生産金額デフレーター作成のための中分類および価格系列数

大 分 類	中分類数	価 格 系 列 数		
		1923—40	1919—23	1914—19
紡 織 工 業	13	31	5	16
化 学 工 業	17	44	19	18
食 料 品 工 業	13	24	18	21
製材および木製品工業	3	3	1	4
窯業および土石工業	5	12	1	7
金 属 工 業	3	9	7	11
機 械 工 業	14	4	4	3
その他の工業	9	16	15	31
鉱 業	4	21	17	9
電 気・ガ ス	2	2	—	—
印 刷・製 本	1	0	—	—

- (注) 1. 指数のリンクのため、価格系列を定める期間は1年づつダブッている。
 2. 中分類数は1923—40年のものであり、他の期間では若干少なくなる。
 3. 一は、生産金額データが存在しないことを示す。

金羅北道、金羅南道、慶尚北道、慶尚南道における全生産額と江原道の生産額の三分の一を近似的に朝鮮南部の生産額と考えることにした。

ここで、実質生産額の推計法にふれておこう。既述のように、この期間の生産統計は、品目別の生産金額とともに生産数量を示している。そこで、比較的等質的な品目グループについては、この2者から計算される実効単価を物価データとして利用することが出来る。ただ、機械等に見られる品質差のはげしい品目グループについては、そのグループを代表する品目の卸売物価等を利用することにした⁶⁾。なお、実効単価の計算にあたっては、全朝鮮の数字から求められたものを、全朝鮮のみならず朝鮮南部についても利用している。次に、産業別の生産額を品目グループの性格に応じて中分類に分割した。この分類にあたっては、一応戦前の日本の産業分類が参照されたけれども、作業上の理由から若干の合併、分割もおこなわれている。このような中分類の大部分には、数個の価格系列が対応している。そこでこれらの系列を指数化し、1930—32年平均の生産金額の構成比で加平均して中分類に対応するデフレーターを作成した。次に、産業別のデフレーターは、インプリシット・デフレーター方式——すなわち各年の産業別生産額加重調平均を利用する方式——が採用された。中分類の一部(例えば「その他食料品」等)には中分類別のデフレーターが存在しないものがあるが、産業別デフレーターの計算にあたってはこれらのウェイトは0とされている。産業別デフレーターを鉱工業にまとめあげる場合にも、産業別生産額をウェイトとするインプリシット・デフレーター方式が利用されている。第1表には1928—40年の計算に利用された中分類およびデフレーター作成に用いられた価格系列数が示されている。

1919—27年についての生産統計は極めて不便な形でしか集計されていない。まず概念上の問題として「4人以下の従業員」をもつ事業所の生産額のとりあつかいが明らかでない。次に、この期

間については品目ベースの生産金額、生産数量は示されておらず、中分類(またはそれを2~3個に分割した程度)別の生産金額が示されているにすぎない。したがって、これら分類内でのカバレッジが時系列的にどのように変化したかについては情報が得られない。更に、この期間に示されている中分類別の項目数は、1928—40年のそれに比し若干少ない。後者については、1928年における比率を利用して修正することが出来たけれども、前者についてはほとんど補正がおこなわれていない。ただ前者については、1928—40年についてみる限りそれほど大きな補正が必要でないように思われる事実のみが、かろうじて作業の「正当性」を裏付けてくれるにすぎない。一方、この期間については、代表的な品目の卸売物価を利用せざるを得ない。幸いにして、『朝鮮総督府統計年報』には、かなりの数の卸売物価の系列が発表されており、この中から原則として京城における物価系列が採用された。ただ、生産財を中心とする一部品目グループに対応する物価系列を得ることが出来なかった。やむを得ず日本のそれで代用せざるを得なかった。中分類から大分類、大分類から鉱工業への総合方法は、1928—40年のそれと同じ形式が利用されている。

1914—1918年のデータは形式的には1928—40

6) この種の情報は、実効単価の時系列変動が不規則な動きを示す場合に、チェックの役割をもはたしてくれる。

年のそれと同一であり、作業手順も同形式のものが利用出来る。ただ、発表されている品目数が少なく、時系列的な斉合性をたもつためには思い切ったふくらましや補間作業が必要であった。このことから、この期間についての数字を利用する場合、ある程度の誤差をみこむ必要がある。

鉱業統計は、1914—1936年にわたってかなり詳細に発表されているので、生産額の推定にあたっては工業統計の第Ⅲ期の手法が応用出来る。中分類別のデフレーターを作成する場合のウェイトは、工業統計の期間区分にあわせて3種のウェイト体系が作成されている。鉱業に対するデフレーターもインプリシット・デフレーター方式がとられている。上記の理由から、鉱工業生産指数は1937—40年については作成することは出来ないが、以下の作業では利用上の便宜も考慮してこの4年の値を工業生産指数で単純に補外するという方式をとっている。この種の数字が参考指標の域を出ないことはいうまでもない。

〔Ⅲ〕 推定結果

以上述べてきたように、朝鮮の鉱工業生産金額および実質生産額の推計にはなお改良すべき多くの問題点を残している。このような留保を明示しながら、現在得られている推定結果の総括表を示せば第2表が得られる。この表では、読者の便宜を考慮して推計値の絶対額が示されているけれども、本文の最初に述べた主旨よりすれば、「生産金額指数」、「実質生産金額指数」作成のための数字の域を出ない。このことから、本数字はむしろ指数化して利用されることを希望したい。

ところで、ここで示された推計の性格について若干のコメントを加えておこう。われわれの推計を評価する場合、日本および台湾に関する作業と対比してみることが考えられる。このうち、日本の推計⁷⁾はわれわれの推計と比較して格段に多くの情報を使用しており、データ吟味の面でも数段

7) 篠原三代平『鉱工業』、東洋経済新報社、1972年。

第2表 朝鮮の鉱工業生産額指数

	名 目 金 額 (千円)				実 質 金 額 (千円)				物 価 指 数	
	鉱 工 業		工 業		鉱 工 業		工 業		鉱工業	工 業
	全 鮮	鮮 南	全 鮮	鮮 南	全 鮮	鮮 南	全 鮮	鮮 南	全 鮮	全 鮮
1914	55,493	31,383	53,251	31,206	95,992	73,578	93,357	73,044	57.80	57.04
15	83,102	52,577	79,812	52,338	181,354	124,402	177,461	124,001	45.82	44.97
16	95,966	59,113	89,527	58,771	196,015	122,424	190,143	122,048	48.96	47.08
17	130,367	82,342	122,176	81,271	196,402	124,314	189,948	123,147	66.38	64.32
18	185,913	117,286	178,918	116,070	239,635	127,453	234,095	126,252	77.58	76.43
19	221,712	140,620	213,029	139,832	212,505	117,122	204,178	116,367	104.33	104.33
20	258,995	163,452	250,014	162,686	203,034	116,184	192,659	115,492	127.56	129.77
21	250,676	165,097	243,392	164,258	198,978	126,483	192,155	125,792	125.98	126.66
22	285,503	189,453	279,424	188,828	222,559	145,365	217,177	144,779	128.28	128.66
23	289,019	183,333	280,470	182,526	228,635	142,073	221,810	141,169	126.41	126.45
24	304,867	189,217	296,664	188,350	243,042	147,038	235,079	146,012	125.44	126.20
25	327,871	204,549	318,135	202,761	263,940	156,670	255,798	155,501	124.22	124.37
26	390,847	249,146	380,999	247,285	323,978	199,922	315,672	198,680	120.64	120.69
27	365,675	223,221	355,439	221,999	319,865	188,869	310,303	187,639	114.32	114.55
28	363,315	221,724	351,676	220,423	310,952	184,651	300,110	183,157	116.84	117.18
29	376,167	229,731	263,895	228,529	322,461	189,982	310,284	188,519	116.66	117.28
30	320,202	191,170	309,557	189,981	312,996	184,515	301,515	183,010	102.30	102.67
31	296,270	176,545	287,202	175,364	330,341	197,807	319,809	196,240	89.69	89.80
32	355,479	198,404	343,726	196,532	361,313	209,743	346,495	207,049	98.39	99.20
33	417,373	230,665	401,239	227,645	460,782	259,589	442,419	255,953	90.58	90.69
34	496,328	269,873	473,607	265,665	499,998	269,955	476,094	265,471	99.27	99.48
35	649,064	328,413	608,405	321,330	655,259	334,089	613,247	326,615	99.05	99.21
36	762,692	380,707	709,016	370,505	753,990	379,584	704,358	370,426	101.15	100.66
37			908,960	485,100			866,930	403,130		104.85
38			1,058,963	571,862			729,593	448,899		145.14
39			1,321,072	656,523			1,282,391	431,490		167.82
1940			1,642,334	837,403			987,636	538,298		166.29

高いレベルにあることを認めざるを得ない。当面目標となるのは、朝鮮の場合に比してやや多くの統計をそなえている台湾に関する推計との対比であろう。篠原氏による台湾の鋳工業の名目生産額についての推計結果の特色としては、(イ)『台湾商工統計』にしめされた鋳工業生産金額を40～50%程度うわまわっていること、(ロ)2者の差は時点をさかのぼるほど大となっていること、換言すれば名目生産額の成長率が『台湾商工統計』の場合よりもかなり低めに出るということである。

篠原推計にみられる特色はわれわれの場合にも見出すことが出来る。第3表は、『朝鮮総督府統計年報』に示された工産品の生産額と第2表の本推計とを対比したものである(鋳業に関する数字は2者の間にそれほど相違がないので、ここでは吟味されていない)。同表をみると、1930年代における2者の間の差は篠原氏による台湾推計の場合ほどには大ではない。その大きな理由は、氏が利用した『台湾商工統計』に専売品が含まれてい

第3表 名目工業生産額の推計と「公表」数字
(全鮮:千円)

	(A)	(B)	A/B
	本 推 計	公 表 値	
1915	79,812	54,925	1.453
1920	250,014	204,385	1.223
1925	318,135	269,364	1.181
1930	309,557	280,964	1.102
1935	608,405	607,477	1.002
1940	1,642,334	1,873,633	0.877

ないが、『朝鮮総督府統計年報』の工産品の中には専売品の一部をも含んでいるという事情にある。一方、台湾推計の特色(ロ)は、朝鮮の場合も明確な形であらわれている。すなわち、前者における比率 A/B に対応する値は1930年代1.4、1910年代1.9であったのに対し、後者では1.0から1.4へ増加している。この事実、1934—36年を基準として計算した本推計の値自身当時の工産品生産を充分カバーしていない可能性を有していることを示している。事実、公表数字のカバレッジが最も高い1940年では「公表数字」のほうが本推計の1.14倍となっている。この事実、本推計を戦後の値と比較する場合考慮されなければならない⁸⁾。次に、第2表の実質金額を指数化することによ

って求められる「生産指数」(第5表参照)はインプリシット・デフレーターを利用した実質金額を指数化したものであるから、通常のラスパイレス式を基幹とした指数とは性格をこととしている。また、物価指数は金額指数を生産指数で除すことによって求められるから、ここでは全朝鮮に対する数字のみが示されている。

次に興味ある試みとして、産業別の生産指数の作成と生産額の動向の分析をあげることが出来る。第4—5表はこのような目的のために作成された表から名目金額による構成比と、産業別生産指数を示したものである。ただ、今回の作業では、鋳業、電力・ガス、印刷・製本業の数字が一部の時点についてしか得られなかったため、これらの生産額は「別掲」としてあつかい、産業別構成比は「別掲」を除く工業生産額に対する比率で示すことにした。したがって、年次によっては全体の構成比が100をこえることがある。

[IV] 鋳工業生産の成長率

鋳工業生産の推計を利用してすすめられ得るトピックはかなりの数にのぼるであろう。これらの中で興味あるものとして、朝鮮における投資と工業生産の関連分析や雇用統計を利用した労働生産性の分析等があげられよう。前者については、現在筆者によってすすめられている台湾および朝鮮の投資推計作業の完成をまって検討をすすめたほうが効率的であろうし、後者についても尾高氏の研究の公表をまって分析をすすめたほうが望ましい⁹⁾。このような理由と紙数の制約から、本論では極めて初歩的な計算をほどこしておくにとどめたい。

第6表は、産業別、地域別に実質生産額の成長率を計算したものである。同表で「朝鮮北部」とは全朝鮮から「朝鮮南部」をさし引いたものとして

8) ついでながら、この種の比較にあたっては第2次大戦後の韓国の工業統計に従業員4人以下の事業所の生産額が含まれていない点に注意が必要である。

9) 尾高氏の朝鮮の雇用に関する研究は、尾高焯之助「日本統治下における朝鮮の雇用と賃金」(一橋大学経済研究所加工統計シリーズ9)として発表されているが、Working paperの段階であるので利用はさしひかえたい。

第4表 名目生産金額の構成比

		(i) 食料品工業	(ii) 紡織工業	(iii) 製材及び 木製品工業	(iv) 化学工業	(v) 窯業及び 土石工業	(vi) 金属工業	(vii) 機械工業	(viii) その他 の工業	(x) 鉱業 (別掲)	
全朝鮮	1914	0.28219	0.14653	0.01433	0.11551	0.04706	0.18820	0.02488	0.18129	0.04191	
	1915	0.40744	0.11368	0.00972	0.11689	0.03081	0.14134	0.01654	0.16357	0.04122	
	1916	0.34973	0.14357	0.01663	0.13425	0.01882	0.14128	0.01826	0.18346	0.07192	
	1917	0.34315	0.16955	0.01408	0.14791	0.01988	0.11951	0.03085	0.15510	0.06704	
	1918	0.35916	0.18357	0.01541	0.11097	0.02431	0.09854	0.04727	0.16076	0.03910	
	1919	0.37394	0.17112	0.02780	0.11433	0.03433	0.07585	0.03596	0.16667	0.04076	
	1920	0.38021	0.16024	0.03785	0.11542	0.04110	0.05996	0.03923	0.16899	0.03592	
	1921	0.38362	0.16631	0.04222	0.11252	0.04225	0.05172	0.04163	0.15973	0.02993	
	1922	0.39140	0.14459	0.03620	0.15383	0.05223	0.04905	0.04379	0.12890	0.02176	
	1923	0.40478	0.16240	0.04491	0.12857	0.03593	0.05839	0.03787	0.12715	0.03048	
	1924	0.44438	0.14769	0.03941	0.12861	0.03280	0.05775	0.03423	0.11512	0.02765	
	1925	0.41560	0.14821	0.04254	0.15604	0.03345	0.06012	0.03395	0.10989	0.03060	
	1926	0.42248	0.13098	0.03704	0.16865	0.02933	0.07088	0.02849	0.11216	0.02585	
	1927	0.42484	0.13741	0.03970	0.17210	0.02905	0.06758	0.03178	0.09753	0.02880	
	1928	0.45318	0.16606	0.01287	0.14293	0.03385	6.06591	0.02579	0.09961	0.03310	
	1929	0.45932	0.16438	0.01392	0.14193	0.03708	0.06096	0.03018	0.09222	0.03372	
	1930	0.46249	0.16050	0.01663	0.15267	0.03368	0.06206	0.02028	0.09170	0.03439	
	1931	0.48259	0.13723	0.01782	0.17332	0.03120	0.06912	0.01359	0.07513	0.03157	
	1932	0.42808	0.17382	0.01458	0.17615	0.02891	0.08872	0.02582	0.06392	0.03419	
	1933	0.40439	0.16633	0.01570	0.19717	0.02750	0.10980	0.01875	0.06035	0.04021	
	1934	0.36468	0.16643	0.01531	0.21621	0.02755	0.13052	0.07035	0.05894	0.04797	
	1935	0.34720	0.15468	0.01425	0.25439	0.02878	0.12466	0.01960	0.05644	0.06683	
	1936	0.33034	0.16862	0.00841	0.25577	0.03161	0.13127	0.02021	0.05378	0.07570	
	1937	0.29631	0.16493	0.01207	0.27432	0.02761	0.15876	0.01746	0.48503	—	
	1938	0.29368	0.18949	0.01384	0.26213	0.03376	0.12567	0.01850	0.06293	—	
	1939	0.27586	0.16556	0.01588	3.31021	0.03283	0.10944	0.03609	0.05413	—	
	1940	0.25043	0.18572	0.01904	0.33745	0.03744	0.08014	0.03968	0.05009	—	
	朝鮮南部	1914	0.29017	0.18009	0.01657	0.19272	0.05009	0.05252	0.02765	0.19019	0.00567
		1915	0.45290	0.10329	0.00879	0.18109	0.02933	0.04895	0.01616	0.15948	0.00457
		1916	0.37319	0.14039	0.01011	0.19847	0.01923	0.06369	0.01632	0.17861	0.00582
		1917	0.36925	0.17942	0.01308	0.21372	0.01873	0.02920	0.03239	0.14422	0.01318
		1918	0.39860	0.18677	0.01665	0.14993	0.02483	0.01692	0.05571	0.15059	0.01048
		1919	0.41099	0.19297	0.01963	0.13679	0.02778	0.00577	0.04542	0.16059	0.00564
		1920	0.42211	0.18774	0.03060	0.12819	0.03005	0.00649	0.04619	0.16862	0.00471
1921		0.42357	0.17462	0.03044	0.12536	0.03476	0.00545	0.05221	0.15359	0.00511	
1922		0.40301	0.15183	0.03060	0.17503	0.05657	0.00418	0.05413	0.12465	0.00831	
1923		0.43646	0.18137	0.04296	0.13212	0.02841	0.00576	0.04776	0.12514	0.00442	
1924		0.45527	0.16028	0.04229	0.14584	0.02756	0.00539	0.04450	0.11888	0.00460	
1925		0.45108	0.16347	0.04353	0.16014	0.02510	0.00445	0.04163	0.11059	0.00882	
1926		0.47330	0.14790	0.03548	0.18464	0.01883	0.00658	0.03524	0.09804	0.00753	
1927		0.48903	0.16053	0.04016	0.13637	0.02104	0.00738	0.04370	0.10178	0.00550	
1928		0.49996	0.18925	0.01426	0.11281	0.02668	0.02750	0.03761	0.09692	0.00590	
1929		0.49749	0.18867	0.01647	0.10455	0.02561	0.02440	0.04317	0.09965	0.00576	
1930		0.52359	0.19624	0.02038	0.09231	0.01566	0.02290	0.02762	0.10128	0.00626	
1931		0.54993	0.17664	0.02296	0.09293	0.01433	0.02931	0.01589	0.09801	0.00673	
1932		0.49575	0.23076	0.01894	0.08391	0.01727	0.04263	0.03499	0.07575	0.00953	
1933		0.49511	0.21986	0.01980	0.08812	0.01740	0.05632	0.02375	0.07965	0.01327	
1934		0.47020	0.22397	0.01865	0.09447	0.02169	0.06558	0.02490	0.08054	0.01584	
1935	0.46357	0.22951	0.01935	0.10004	0.01855	0.06321	0.02649	0.07927	0.02204		
1936	0.43942	0.25141	0.01133	0.09959	0.02319	0.06783	0.02761	0.07961	0.02754		
1937	0.38906	0.25340	0.01500	0.09906	0.01962	0.13822	0.02207	0.06356	—		
1938	0.37268	0.28998	0.01666	0.08030	0.01535	0.13226	0.01945	0.07343	—		
1939	0.37731	0.25593	0.02081	0.09713	0.01798	0.10625	0.04893	0.07567	—		
1940	0.33904	0.28213	0.02193	0.13205	0.01929	0.08265	0.05366	0.06925	—		

第5表 産業分類別生産指数

	(i)	(ii)	(iii)	(iv)	(v)	(vi)	(vii)	(viii)	(ix)	(x)	(xi)	
	食料品工業	紡織工業	製材及び木 製品工業	化学工業	窯業及び 土石工業	金属工業	機械工業	その他の 工業	工業計	鉱業	鉄工業	
全朝鮮	1914	11.601	15.329	15.348	1.104	37.273	23.523	32.896	68.646	15.614	6.841	15.083
	1915	33.938	17.130	21.452	15.270	36.889	26.810	33.403	106.448	29.681	10.107	28.496
	1916	31.491	22.858	23.807	18.920	21.503	30.944	36.867	123.587	31.802	15.246	30.800
	1917	31.471	23.596	29.315	12.888	18.631	34.641	44.204	136.408	31.769	16.757	30.861
	1918	35.445	21.455	37.327	13.211	21.356	87.850	70.012	114.325	39.153	14.384	37.654
	1919	33.970	18.103	59.145	15.164	26.863	59.004	28.160	108.798	34.149	21.620	33.391
	1920	32.495	14.751	77.145	17.118	32.370	46.963	34.474	103.272	32.223	26.937	31.903
	1921	34.750	19.043	64.667	17.598	47.277	29.508	49.755	102.473	32.138	17.715	31.265
	1922	39.142	18.927	74.885	27.607	63.476	31.363	70.337	84.446	36.323	13.973	34.971
	1923	40.022	28.620	93.589	22.850	39.507	35.895	62.617	85.941	37.098	17.720	35.925
	1924	46.323	25.226	95.065	24.505	42.255	38.180	54.890	85.310	39.817	20.675	38.189
	1925	45.084	26.972	110.480	30.098	50.532	43.616	67.694	100.541	42.783	21.139	41.473
	1926	55.471	31.441	125.422	40.102	54.369	54.681	70.303	127.101	52.797	21.565	50.907
	1927	54.100	35.646	129.820	39.287	60.102	49.957	82.468	113.090	51.899	24.826	50.260
	1928	17.881	43.219	43.810	32.415	68.277	42.693	66.714	103.846	50.194	28.149	48.860
	1929	62.628	46.160	62.677	29.121	79.545	45.008	79.169	90.714	51.896	31.615	50.668
	1930	68.974	49.663	68.713	29.945	62.511	47.741	51.575	84.479	50.429	29.808	49.181
	1931	68.000	49.684	77.294	29.301	55.238	57.187	35.995	72.142	53.489	27.344	51.906
	1932	65.819	69.746	94.090	31.793	49.071	60.418	80.316	73.019	57.952	38.472	56.773
	1933	87.821	66.877	147.848	59.489	63.227	69.758	64.445	75.405	73.996	47.676	72.403
	1934	82.272	79.441	114.919	72.543	70.478	83.506	75.845	84.236	79.628	62.063	78.565
	1935	108.375	88.584	110.832	103.942	108.439	100.080	103.764	102.333	102.567	109.077	102.961
	1936	109.353	131.975	74.249	123.514	121.083	116.414	120.391	113.431	117.805	128.861	118.474
	1937	107.234	116.549	105.053	227.538	137.311	153.573	105.185	110.057	114.996	—	136.221
	1938	126.675	83.673	112.429	124.798	195.127	121.923	113.702	161.053	122.026	—	114.641
	1939	137.850	112.005	123.730	454.251	206.220	145.305	266.589	109.869	214.483	—	201.502
	1940	150.958	151.991	140.810	185.989	223.304	132.066	346.224	186.653	165.184	—	155.187
朝鮮南部	1914	11.440	12.870	13.094	56.280	60.751	21.078	29.854	67.316	22.767	7.587	22.441
	1915	36.289	14.332	15.971	79.718	58.954	33.370	29.948	81.593	38.649	5.697	37.942
	1916	32.690	19.193	20.066	92.097	38.728	50.064	31.430	55.111	38.040	5.342	37.339
	1917	33.500	19.812	25.550	61.658	31.598	30.708	40.013	104.152	38.383	16.580	37.915
	1918	37.867	18.014	37.331	58.482	38.743	24.627	75.617	89.471	39.351	17.063	38.872
	1919	36.653	15.500	35.574	60.772	40.452	10.107	33.111	88.441	36.270	10.726	35.721
	1920	35.440	12.986	58.131	63.061	42.161	12.282	40.578	87.411	35.997	9.831	35.435
	1921	38.577	17.159	45.075	65.472	71.859	10.174	59.614	84.447	39.207	9.817	38.576
	1922	40.914	17.073	61.269	107.526	127.204	8.161	83.119	70.056	45.125	8.325	44.335
	1923	42.535	26.136	83.449	79.229	55.669	10.742	72.619	69.863	44.000	12.843	43.331
	1924	45.724	21.919	92.758	88.425	61.694	11.133	64.071	71.121	45.510	14.577	44.846
	1925	46.580	23.677	103.187	96.429	63.653	10.995	74.712	82.281	48.467	16.608	47.783
	1926	59.639	29.111	111.684	144.445	62.033	16.928	79.709	93.928	61.925	17.645	60.975
	1927	57.791	32.765	117.478	98.930	74.437	17.472	99.522	94.392	58.484	17.475	57.604
	1928	59.000	39.362	44.264	80.549	92.350	29.692	74.136	80.999	57.087	21.226	56.317
	1929	63.319	42.863	66.145	68.174	88.195	27.274	100.462	71.778	58.758	20.785	57.943
	1930	59.889	50.508	91.869	63.227	46.875	31.128	61.037	68.523	57.041	21.382	56.276
	1931	67.813	50.330	86.655	61.924	48.760	42.571	36.145	76.707	61.165	22.263	60.330
	1932	61.829	68.478	99.343	64.681	50.101	53.518	87.658	66.043	64.534	38.274	63.970
	1933	88.815	64.762	152.646	76.476	61.620	78.197	64.682	73.794	79.777	51.658	79.173
	1934	84.178	75.534	111.530	90.461	78.988	83.081	73.936	84.655	82.743	63.705	82.334
	1935	108.574	88.113	113.963	105.845	97.815	98.183	104.837	99.962	101.801	106.185	101.895
	1936	107.248	136.353	74.508	103.694	123.197	118.736	121.228	115.383	115.456	130.110	115.771
	1937	107.955	131.710	99.247	129.166	143.626	260.906	102.450	101.306	125.649	—	122.952
	1938	170.565	78.448	105.021	101.200	116.140	253.394	91.667	133.720	139.915	—	136.911
	1939	132.712	110.128	114.349	122.670	120.707	256.365	254.084	100.202	134.487	—	131.602
	1940	149.610	152.621	120.124	196.692	130.783	253.966	336.274	175.203	167.779	—	164.177

第6表 産業別・地域別・期間別鉱工業生産の成長率の推定

	1914—27			1928—40			1912—38
	全朝鮮	朝鮮南部	朝鮮北部	全朝鮮	朝鮮南部	朝鮮北部	台湾
食料品工業	7.13	7.26	6.88	8.43	8.88	4.98	2.60
紡織工業	4.71	5.48	3.05	10.00	10.53	7.99	2.36
製材および木製品工業	16.34	17.38	14.90	6.89	4.83	13.41	3.97
化学工業	8.87	4.41	12.63	21.62	7.49	27.18	1.06
窯業および土石工業	6.57	3.99	9.82	11.81	7.03	14.24	3.00
金属工業	3.20	0.00 ⁺	5.79	11.55	21.82	6.78	4.03
機械工業	6.52	8.89	0.00 ⁺	12.98	10.77	19.87	4.47
その他の工業	2.42	1.07	0.00 ⁺	5.22	6.17	3.65	3.17
鉱業	6.33	6.68	6.47	19.70 [*]	25.28 [*]	18.67 [*]	2.21
工業計	5.31	4.86	6.22	12.37	9.70	15.05	2.48
鉱工業計	5.33	4.87	6.25	11.56 [*]	9.34 [*]	14.31 [*]	—

(注) 1. *印は1928—36年, +印は回帰の係数が有意でないもの。

定義される。成長率の計算は、実質生産額 $X(t)$ に

$$\log_e X(t) = a + bt$$

を最小二乗法であてはめて求められている。また、鉱工業生産の発展段階を数字的にあらわす試みとして対象期間を

前期 1914—27

後期 1928—40(鉱業 1928—36)

の2区間に分割して計算がすすめられている。また、同表には参考として、台湾における鉱工業生産の成長率(1912—40年)の値が付記されている。

最初に全朝鮮についての結果を検討してみよう。全鮮に関する工業生産の成長率は全期間平均約8%という数字を示しているが、この値は1905—35年における日本工業の平均成長率6.11%¹⁰⁾、1912—40年間に於ける台湾の平均成長率2.48%と比較してかなり高い値と考えられる。特に、後期における成長率の高さは、朝鮮の工業化が昭和期後半において急速にすすめられた確証として注目されよう。産業別に検討するにあたっては、繊維、食品、化学、機械・金属、鉱業の5大産業にまず着目されなければならない。これらのうち、在来産業から出発した製材・木製品、食品、産業が前期において高い成長率を示しているのに対して、機械、金属、化学、鉱業の後半における発展が注目される。

朝鮮南部および同北部間の成長率の差は、第6表の後半期において見出すことが出来る。すなわち「南部」においては、紡織、食料品の軽工業と金属工業(主として精錬)・鉱業の増加がいちじるしいのに対して、「北部」では化学、窯業、機械工業および鉱業の発展が目ざましい。これらのプロセスは1945年の日本統治の終結まで継続しており、第2次大戦後から1950年代ではこのような相違が大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の間についても見出されていたことは明記されなければならない。

[V] むすび

たびたび述べてきたように、本論の作業結果は別の作業をすすめるうえでの副産物である。このような理由から、その結果をめぐる解釈や分析はほとんどすすめられていない。この種の研究は将来に待ちたいと思う。(一橋大学経済研究所)

[追記] 本論完成後、李潤根氏による朝鮮製造業の名目生産額の推計が1926—36年についておこなわれていることを知った。氏の推計と本推計との詳細な比較は別の機会にゆずるが、1930年代後半の推計結果には大差がなく、年をさかのぼるにしたがって本推計の値が李推計をうまわまっていることだけを指摘しておく。李潤根「韓国国民所得推計とその内容(1926—1936)」、趙璣濬他『日帝下の民族生活史』、民衆書館、1971年参照。

10) 塩野谷祐一「日本の工鉱業生産指数, 1905—1935年」(篠原三代平『産業構造論』、筑摩書房、別冊、1966)